学生に共同生活の良さを

古アパート改修「アート下宿」に

京都造形芸大、家主に提案

アトリエ、談話室も

古い木造アパートを昔ながらの「下宿」に改修し、学生たちに共同生活の良さを知ってもらいたい。京都市左京区の京都造形芸術大と不動産会社が、こんなユニークな構想を膨らませている。共有スペースの一部をアトリエや談話室とし、人の交流を中心にした空間を家主に提案する計画だ。大学側は「不況のなか、より快適で安価な住まいを学生に提供したい」としている。

学生の多い京都市内には、築三十年から五十年の木造賃貸物件が今も点在している。四畳半または六畳一間、トイレ・浴室・台所は共同という物件は、安い家賃が魅力のひとつになっている。しかし、マンション志向の強い若者には敬遠され、家主も高齢化し改修に手が回りにくいのが実情だ。

そこで、建物の共有部分を生かし、芸大生向けの工房などを設ける案が浮上した。具体的には、大学と不動産会社フラットエージェンシー（本社・北区）が学生の要望を聞き取り、家主に改修プランを提示する。完成後は大学側の「お墨付き物件」として、学生に積極的にあっせんする。

共同台所を電化キッチンにする案や天然木材を使った談話室を作る案も検討している。環境デザイン学科の学生からアイデアを募る計画もある。

京都造形芸大教学事務室は「孤立しがちな今の若者にとって、ワンルームマンションと違った共同生活は、新しい刺激になるのでは」と話す。家主側も「少ない改修費で古い建物を有効活用できる」と期待もある。不動産会社の試算では、家賃は月二万五千―三万円程度に抑えられるという。

今後、希望する家主と交渉を進め、入居開始は来春ごろになる。「他大学も含め、京都全体にこうした動きが広がれば」と大学、不動産会社は期待を寄せている。